



HAL
open science

Miyakogo Ōgami hōgen no fukudōshi to datsujūzokuka (宮古語大神方言の副動詞と脱従属化)

Thomas Pellard

► To cite this version:

Thomas Pellard. Miyakogo Ōgami hōgen no fukudōshi to datsujūzokuka (宮古語大神方言の副動詞と脱従属化). 140th Meeting of the Linguistic Society of Japan, Linguistic Society of Japan, Jun 2010, Tsukuba, Japan. pp.316–321. <hal-01681193>

HAL Id: hal-01681193

<https://hal.science/hal-01681193>

Submitted on 11 Jan 2018

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

宮古語大神方言の副動詞と脱従属化

Thomas PELLARD (トマ・ペラール)

(京都大学・日本学術振興会) thomas.pellard@gmail.com

1 はじめに

本発表では南琉球の宮古語大神方言（以下、大神方言）の副動詞の体系を考察し、特に副動詞が主要部となっている従属節の *desubordination*（「脱従属化」）の現象に着目する。

大神方言は宮古語の一方言であり、南琉球の大神島で話されている。大神島の人口は現在 30 人弱で、移住した人達を加えても話者の数が 100~150 人を越えないと思われ、この方言は深刻な消滅の危機に瀕している。大神方言は音韻が日本列島の中で最も特異で世界の諸言語から見てもめずらしいことから以前より注目を集めている。しかし文法に関しては体系的かつ詳細な記述は今まで皆無であった¹。

本発表の資料は筆者が大神島で現地調査（2006~2010 年）を行って集めた自然談話とエリシテーションのデータに基づく。

2 大神方言の副動詞

大神方言にはテンスなどの屈折標識との共存が制限され、基本的に主節に現れることのない、独立性の欠けた動詞形がいくつもある（表 1）。また、その主な機能は副詞的な従属節を形成することであることから、「副動詞」（*converb*）と見ることができる。

- (1) a. *pampin=nu fau-sseen assu*
テンプラ= ACC 食べる-SIMUL する. IMP
「テンプラを食べながらやりなさい！」
- b. *skama=u asi-ta puur-i=i-tika pssi-f=tu nar-i=uu*
仕事= ACC する-CVB.NEG 座る-CVB= IPF- ANT 寒い-ADVZ= FOC なる-CVB= IPF
「仕事しないで座っていると寒くなっている。」

Haspelmath (1995:3) による副動詞の典型的な定義（“a nonfinite verb form whose main function is to mark adverbial subordination”）では「不定形」と「従属」という二つの基準が提示されている。ただし、Haspelmath (1995:4-5,12) 自身も認めているように、定形性も従属性も中間段階が認められ境界のはっきりしないカテゴリーである²。

大神方言の副動詞のなかには Haspelmath (1995) の定義と完全に合致しないものもある。例えば、*circumstantial* 副動詞（*-ripa*）と *imperfective* 副動詞（*-iiri*）はテンスの接尾辞をとることができ、「不定形」、すなわち屈折に関して形態論的な不完全性を示しているとは言えない。

- (2) a. *pstu-nummεε (kanu) mmna iak-i sun-as-ai-tar-ipa unu akaurεε=nu*
人-PL.TOP (FILL) 全部 焼く-CVB 死ぬ-CAUS-PASS-PST-CIRC PROX アカイウレー=NOM
- miitu-kam=ma uri=kara=tu suma-u=pa pssuki-tau*
夫婦-神-PL TOP PROX=ABL=FOC 集落-ACC=TOP 広げる-PST
- 「村人が皆焼き殺されたので、アカイウレーの神の夫婦はそれから集落を広げた。」

¹大神方言に関する総合的な研究（音声・音韻、形態論、統語論、系統、歴史的な変化）として Pellard (2009) がある。Pellard (in press) も参照。

²Lehmann (1988), Bickel (1998), Creissels (2006), Nikolaeva (2007b) など参照。

表 1: 宮古語大神方言の副動詞

ラベル	接辞	機能・意味
concessive	-pamai	譲歩
negative concessive	-tarapamai	否定の譲歩
simultaneous	-(s)seen	同時
purposive	-ka	移動の目的
negative conditional	-taka	否定の条件
anterior	-tika	事前、条件
circumstantial	-(r)ipa	状況、条件
imperfective	-(i)iri	不完成
conditional	-iika	条件
negative	-ta	否定
narrative	-i, Ø	継起、方法
sequential	-siti ~-sti	継起

- b. *aparaki pstu iar-ii=tu murau pstu=nu uma-kama=kara ks-tar-iiri*

綺麗 人 COP- CVB= FOC もらう 人= NOM ここ-あそこ= ABL 来る- PST- CVB.IPF

<mendokusai>=ti bura=nkai=kami ik-i kam nar-i=uu

面倒くさい= QUOT 保良= DIR= TERM 行く- CVB 神 なる- CVB= IPF

「綺麗な人だったので、求婚する人があっちこっちから来ていたら、面倒くさいと言って保良まで逃げて神になった (=他界した)。」

しかし、これらの副動詞は過去の接尾辞を取らず、主節の動詞のテンス表示に依存している場合も多く、「定形」とは言い難いと思われる。

- (3) *kisa saukuu=u asi-iri=tu <denwa>=nu nauur-ipa=mai ksk-a-tatauu*

先程 掃除= ACC する- CVB.IPF= FOC 電話= NOM 鳴る- CIRC= INCL 聞く- IRR- PST.NEG

「さっき掃除をされていて電話がなっても聞こえなかった。」

- a. *kuuna=a skama=nu ar-iiri=tu ik-ai-tata-m*

昨日= TOP 仕事= NOM ある- CVB.IPF= FOC 行く- POT- PST.NEG- IND

「昨日は仕事があつて行けなかった。」

また、大神の副動詞は狭義の従属節だけでなく、節連鎖にも現れる。節連鎖は形式的に非独立的な動詞形によって作られるが、談話において主節と等位のイベントを表し、backgroundingではなく foregroundingの機能を持っている。意味的に並列構文に近い。

- (4) a. *uri=i ara-i-siti nuku-i-siti nnas-i usk-i*

PROX= ACC 洗う- CVB- SEQ 拭く- CVB- SEQ 片付ける- CVB PREP- IMP

「これを洗って、拭いて、片付けておきなさい。」

- b. *mii-tauu=nu pstu=nu kss-i maar-i <ozii>=ka mai maar-i-siti peut-auu*

三- CLF= NOM 人= NOM 来る- CVB 回る- CVB おじいさん= NOM 前 回る- CVB- SEQ 去る- PST

「三人の人が来て、おじいさんの前を通過して去った。」

Shimoji (2009) は同宮古語の長浜方言の記述において節連鎖を形成するものを *converb* とは区別して *medial verb* と呼んでいる。しかし、従属的な用法も見られ、他の副動詞とはまったく別のカテゴリーにする必要があまりないと思われる。並列的な副動詞 (*coordinative verb*) もたびたび想定されることがある (Nedjalkov 1995)。一方、*medial verb* とはもっぱら節連鎖に現れるものを指しているようである (Haspelmath 1995:20–27)。

このように大神方言における以上の動詞形の一群は副動詞に非常に近いが、副動詞の伝統的な定義から見るといくつか問題がある。しかしこの言語で、Haspelmath (1995) などの定義による狭義の副動詞

とそれにあてはまらない形の間共通点を見逃して別のものとして扱うメリットが少ない。代りに不定形性や従属性という基準を廃止し、副動詞を主節の述語に依存する非独立的な動詞形と定義すれば問題が解決される³。Nedjalkov (1995:97) による定義はそれに近い：

a verb form which depends syntactically on another verb form, but is not its syntactic actant, i.e., does not realize its semantic valencies.

3 脱従属化

基本的に大神方言の副動詞は従属節をなすが、主節の主要部になることもある。この現象を *desubordination* (脱従属化)⁴ と呼ぶ。脱従属化においては副動詞が副動詞の特徴を保ちながら新しい意味を獲得する。

3.1 副動詞 *-pamai*：「譲歩」から「許容」へ

譲歩の副動詞 *-pamai* は通常譲歩を表し、*iunumunu* (「同じ」) を伴うと許容を表す：

- (5) a. *ua=a naupasi fa-a-pamai iks=mai tara-a-n*
父= TOP 如何に 食べる-IRR-CSV 何時= INCL 足りる-IRR-NEG
「お父さんはいくら食べてもいつも足りない」
b. *ata kuu-pamai iunumunu?*
明日 来る.IRR-CSS 同じ
「明日来てもいい？」

しかし *iunumunu* が現れないことが多く、副動詞が主節に立ち得る：

- (6) a. *ata kuu-pamai?*
明日 来る-CSV
「明日来てもいい？」
b. *kare=e ik-a-pamai ias=suka*
DIST= TOP 行く-IRR-CSV COP=but
「彼は行ってもいいが…」

この場合 *iunumunu* が常に復元可能であるので省略と解釈できる。ただし、*-pamai* が主節に現れている場合、*iunumunu* だけが復元可能であり、譲歩以外の意味を表せない。この脱従属化を「慣習的な省略」(*conventionalized ellipsis*, Evans 2007) と解釈できる。

3.2 副動詞 *-i*：「継起」から「過去」へ

大神の *narrative converb*⁵ という副動詞は副詞的な従属節と節連鎖を形成する：

- (7) a. *kii=ia auk-i ks-tau*
今日= TOP 歩く- CVB 来る- PST
「今日は歩いて来た。」

³そうすると *medial verb* は副動詞の下位カテゴリーとなる。

⁴Aikhenvald (2004) の命名に従う。Evans (2007) では同じ現象を *insubordination* と呼んでいる。上で見たように大神方言の副動詞が形成するのは必ずしも従属節ではないが便宜上用語をそのまま使うことにする。

⁵Shimoji (2009) の *medial verb* と Hayashi (in press) の *Absolute Converb* に相当する。

- b. <tomodatsi>=nu kss-i pssui mmna kago=nkai ur-i...
 友達= NOM 来る- CVB 拾う. CVB 全部 籠= DIR 入れる- CVB
 「友達に来て、(梨)を拾って、全部を籠に入れて...」

このように -i 副動詞は継起、すなわち相対的なテンスを表している。しかし脱従属化をうけると過去を表すようになる⁶：

- (8) a. ffluu=u=pa mmε num-i=tu
 薬= ACC= TOP.OBJ もう 飲む- CVB= FOC
 「薬はもう飲んだよ。」
- b. ikεem=na kam=nu=tu ukam=nkai ur-i kss-i=tta
 昔=TOP 神=NOM=FOC 大神島=DIR 降りる-CVB 来る-CVB=HS
 「昔は神様が大神島に降りてきたそうだ。」
- c. kuuna=a nau=iu=tu asi?
 昨日= TOP 何= ACC= FOC する. CVB
 「昨日は何をした？」

3.3 節以降でこの現象に関連した他方言・他言語での現象・分析をみていく。

3.3 他の宮古諸方言に見られる助動詞省略との違い

Shimoji (2009:328–329) によると、同宮古語の長浜方言（伊良部島）には類似の現象が見られるが、長浜方言では進行の助動詞 *ur-* の省略と解釈されている。しかし、大神方言の脱従属化とは以下の点において大きく異なる。

3.3.1 アスペクト的な意味

長浜方言では進行の意味が現れている：

- (9) kari=a mmja nak-i-i=du
 3SG=TOP INTJ cry-THM-MED=FOC
 '(He) was crying.'

しかし大神方言では進行や不完全などの意味がなく、逆に完成過去を表し、また通常の過去形と自由に交代する⁷。

- (10) a. uma=nu makssee <kuzi>=n=tu ak-i
 そこ= NOM 店 9時= DAT= FOC 開く- CVB
 「その店は9時に開いた」
- b. iaa=nkai ksks-tikaa suku <denwa>=u=tu asi
 家= DIR 着く- ANT すぐ 電話= ACC= FOC する. CVB
 「家に帰ったらすぐ電話した。」
- c. uua=a munu=u fa-i-siti=tu suku nivv-i /niv-tau
 父= TOP ご飯= ACC 食べる- CVB- SEQ= FOC すぐ 寝る- CVB 寝る- PST
 「お父さんはご飯を食べてからすぐ寝た。」

⁶このように narrative converb が過去テンスに用いられるケースは宮古語の諸方言の中でもごく一部に報告がある。法政大学沖縄文化研究所 (1977) などではこれを「第一過去形」と呼び、副動詞とは別のものとして扱っている。

⁷両者の違いは未詳である。

3.3.2 用法

長浜方言では前文に助動詞が現れ、その繰り返しをさけるために省略が行われることが多い：

- (11) a. *manjuu=gami=a ar-i-i=ru u-tar?*
papaya=LMT=TOP exist-THM-MED=FOC PROG-PST
'Were (there) papayas (in those days)?'
b. *ar-i-i=du*
exist-THM-MED=FOC
'(There) were.'

一方、大神方言では脱従属化が全文における助動詞の有無とは関係がまったく見られない。

3.3.3 焦点標識

長浜では焦点標識が常に副動詞についているようであるが、大神では異なる。

- (12) 大神方言
a. *paks=n=tu sas-ai*
蜂= DAT= FOC 刺す- PASS. CVB
「蜂に刺された。」
b. *nnama=tu kss-i*
今= FOC 来る- CVB
「今来たよ。」

以上の理由によって大神方言の脱従属化を助動詞の省略とは別の現象として解釈することが妥当であることが分かる。したがってその起源も助動詞の省略に求めないことにする。

3.4 他の琉球諸語との比較

他の琉球諸語にも脱従属化の現象が見られる。例えば奄美語では大神方言と同様に継起を表す副動詞が脱従属化をうけ過去を表すことがある (Niinaga in press, Shigeno in press)。奄美語の場合はこの語形は助動詞を伴うことがないので助動詞の省略と解釈することが不可能である。

- (13) a. *ju-di, ka-cji, wara-ta*
read-MED write-MED laugh-PST
'(I) read (something), and wrote (something), and laughed.'
b. *uroo kun hon=ba ju-di=na?*
2SG.NHON.TOP this book=ACC read-MED=YNQ
'Did you read this book?' (奄美語湯湾方言、Niinaga in press)

3.5 新しい過去形の出現の背景

節連鎖において継起を表している動詞形が脱従属化を受けることによって過去を表すようになることは宮古語大神方だけでなく、他の琉球諸語にも観察される。この変化がいかに起こったかを証明するのは難しいが、発表者は次のように考えている。

大神方言などにおける節連鎖は非常に長い場合が多く、いくつもの副動詞が並び最後に終止形が現れるのが基本であり、エリシテーションではそのような形が得られる。しかし自然談話のなかでは節連鎖が途中で切断される場合もある。話者の躊躇や気変わり、他人がさえぎることなど、様々な理由がある。

このように副動詞が中断された節連鎖の最後に位置することが、継起という相対的なテンスから独立的な過去への再解釈の起源であろう。主節の動詞がなければ相対的な意味の基準もなく、基準が発話時となるほかない。

4 まとめ

本発表では大神の副動詞の中にテンスの標識がとれたり狭義の従属節の他に節連鎖も形成したりするものがあり、それらが「副動詞を形成する不定形」という副動詞の定義に合わないことを示した。しかしその機能と他の副動詞との類似点を重視し、副動詞と認める立場をとった。このように副動詞を主節の述語に依存する非独立的な動詞形と再定義することを提案した。

また、副動詞が主節に現る「脱従属化」の現象を観察し、新しい過去形を助動詞の省略と解釈せず、談話における節連鎖の中断にその起源があることを提案した。Evans (2007) が指摘したように脱従属化による新しいテンス形の出現は類型論的に稀であると言われており、大神方言や他の琉球諸語の例は注目に値する。

脱従属化は、文法化の研究においても重要である。脱従属化では文法化理論が想定する「独立>非独立」、「談話>形態論」、「語用論>文法」という変遷の過程が逆さまになっており、さらなる調査・研究が文法化理論を発展させることは間違いない。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Bickel, Balthasar. 1998. Review article: Converbs in cross-linguistic perspective. *Linguistic Typology* vol. 2: 381–397.
- Creissels, Denis. 2006. *Syntaxe générale: une introduction typologique*. Paris: Hermes sciences Lavoisier. 2 vols.
- Evans, Nicholas. 2007. Insubordination and its uses. In Nikolaeva (2007a), pp. 366–431.
- Haspelmath, Martin. 1995. The converb as a cross-linguistically valid category. In Haspelmath and König (1995), pp. 1–55.
- Haspelmath, Martin and König, Ekkehard (eds.) . 1995. *Converbs in cross-linguistic perspective: Structure and meaning of adverbial verb forms — Adverbial participles, gerunds*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Hayashi, Yuka. in press. Ikema (Miyako Ryukyuan). In Shimoji and Pellard (in press).
- Lehmann, Christian. 1988. Towards a typology of clause linkage. In John Haiman and Sandra A. Thompson (eds.) *Clause combining in grammar and discourse*, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins, pp. 181–225.
- Nedjalkov, Vladimir P. 1995. Some typological parameters of converbs. In Haspelmath and König (1995), pp. 97–136.
- Niinaga, Yuto. in press. Yuwan (Amami Ryukyuan). In Shimoji and Pellard (in press).
- Nikolaeva, Irina (ed.) . 2007a. *Finiteness: theoretical and empirical foundations*. Oxford ; New York: Oxford University Press.
- Nikolaeva, Irina. 2007b. Introduction. In Nikolaeva (2007a), pp. 1–19.
- Pellard, Thomas. 2009. *Ōgami — Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. Ph.D. thesis, École des hautes études en sciences sociales.
- Pellard, Thomas. in press. Ōgami (Miyako Ryukyuan). In Shimoji and Pellard (in press).
- Shigeno, Hiromi. in press. Ura (Amami Ryukyuan). In Shimoji and Pellard (in press).
- Shimoji, Michinori. 2009. *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language*. Ph.D. thesis, ANU.
- Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) . in press. *Introduction to Ryukyuan Linguistics*. 法政大学沖縄文化研究所 (編) 1977 『琉球の方言—宮古大神島』東京: 法政大学出版局。